



▲田代栄三氏（当時36歳、1920年移住）の住宅と工場。▶コーヒー精製機。田代氏は個人で水力発電を起し、ビンガ酒製造や精米も行ってた。雑貨店を開き、貨物自動車2台、四輪車、二輪車で運送業、養豚も営んだ。視察する日本人は皆、田代邸を訪ねた（本紙、『ブラジル便り』より）



## 1933年の写真帖 に八丈島民の姿



▲大澤庄五郎氏一家（当時50歳、1920年移住）と住宅。所有地は65町歩。コーヒーほか、12.5町歩でカンナ（サトウキビ）の栽培・加工、ビンガ酒製造も



▲浅沼勇松氏（当時61歳、1920年移住）のコーヒー乾燥場の一部。50町歩を所有し、米、キビ、豆、マンジョーカ（根菜類）も作付けしていた



▲浅沼直吉氏（当時77歳、1919年移住）の2町歩余の水田。所有地は65町歩。出身は「八丈島西ヶ原」（西ヶ原は消失した地名？）と記載



▲佐々木定一氏（当時46歳）。佐々木氏は1915（大正4）年に単独でペルーに渡航。ポリビアを経て1921（同10）年にブラジルへ渡る。1929（昭和4）年に帰国し、家族を引き連れブラジルへ再渡航。25町歩を求め、多くの八丈島の移民が作付けしたようにコーヒー、米のほか、ミーリョ（トウモロコシ）も栽培。副業は養豚



戦前の八丈島の人々は無人島を次々と開拓したほか、世界の各地へ出ていった。佐々木氏もそのひとりだった。当時の南海タイムスには、南米パラグアイへの移住方法を紹介した記事もある

## 日本資本による最初の植民地

レジストロ市は、ブラジルで最初の日本資本による植民地だった。約500区域の広大な荒地が売り出され、移民はその土地を会社から購入した。沖縄県、東京都（八丈島）、長野県、熊本県などの人たちが多く入植したため、島しょと山の人たちが作った植民地と言われている。

開拓当時の姿を偲ぶことができるレジストロ開拓20周年記念写真帖が出版されたのは1933年。この写真帖に名前のある八丈島の人たちの多くは入植後13、14年の間に、50町歩（＝畝）前後の広大な農地にコーヒーや米などを作付けし、養鶏や養豚も営んでいた。

【写真帖にある八丈の人たち】▷三根＝奥山幸三郎、沖山弥太郎、沖之株菊一郎、田代栄三、浅沼勇松▷大賀郷＝佐々木敬吉、佐々木定一、菊池尚信、菊池恭之助、菊池喜三朗、菊池福三郎、田村義政、田代栄三▷榎立＝奥山辰一、磯崎重右衛門、大澤庄五郎、上野山健児、村上有蔵▷中之郷＝村上真三郎、村上千代三郎、尾島曹平▷末吉＝浅沼由松、山川啓次郎（米田さんによると、当時の年鑑には写真帖にない人たちの名前も記載されている）。

ブラジルでは、レジストロは日系人が発展させた町として知られる。現在は2、3世たちが、燈籠流しや寿司祭りを主催し、多くの人を集めている。夏の気候は高温多湿で八丈島と似ている。1930年以降に栽培が盛んになった紅茶の畑に、水田、大きな川が流れる日本的な風景の土地だったが、今はその面影はないという。

## 移民政策は食糧対策だった

日本の植民地政策の背景には食糧問題があった。明治初期に約3千万人だった人口が、明治末期に約5千万人、大正末期は約6千万人に急増し、コメ輸入国となった。このため、日本にコメを輸出する植民地を作ることが国策となっていった。

そうして植民地建設のために設立された「東京シンデケート」が、官有地無償払い下げ、植民地建設許可の正式契約をサンパウロ州政府と結ぶ。1913（大正2）年、農商務大臣の意向を受けてこの契約を引き継ぐ会社が植民地建設に着手。1916（大正6）年から日本で自作農300家族の募集が行われた。99家族が同年に、翌年には150家族が送り出された。八丈島の移民が渡ったのはその翌年からだった。